
【巻頭言】

運動疫学研究会の今後の役割

荒尾 孝¹⁾

1) 財団法人 明治生命厚生事業団 体力医学研究所

運動疫学研究会は、平成10年9月に発足以来、4年が経過いたしました。この間、年1回の学術研究集会が横浜、福岡、富山、仙台、東京で開催されました。また、研究会機関誌「運動疫学研究」は第5巻が発行され、会員数は300名に達しようとしております。さらに、研究会の主な活動のひとつであります若手研究者の育成を目的とした運動疫学セミナーがこれまで3回（平成11年福岡、12年富山、14年神奈川）開催され、のべ62名の会員が受講しました。これらの活動実績が残せたのも、多くの会員の方々のご協力によるものと感謝申し上げます。

当研究会会員の研究分野は、運動疫学を始め、疫学・公衆衛生、地域保健、学校保健、産業保健、国際保健、基礎医学（生理学、生化学、解剖学、内科、循環器科、血液、免疫学、消化器科、小児科、老年医学、整形外科）、体力医学、運動生理学、栄養学、スポーツ医学、体育学、運動療法、リハビリテーション、レクリエーション、健康科学（健康医科学、健康増進など）、健康心理学、保健学、社会福祉などの幅広い領域に及び、その対象も成人のみならず小児、中高年、老人、女性とあらゆる対象を網羅しております。このような研究会の現状は、運動疫学に対する期待や関心の高さを物語っていると同時に、これらの複合領域としての運動疫学が長寿社会において益々責任のある学問領域として発展する可能性を示唆するものとも思えます。

運動疫学研究を進めるには、基礎的な方法論としての疫学的手法を利用しつつ、独自の科学的方法論の開発が必要です。運動の科学的理解のためには、適切な評価方法が不可欠です。その意味で、長年運動疫学研究の大きな課題であった身体活動量の評価法の標準化が、現在、当研究会の会員が中心となって進められており、その成果が1日も早く提供されることが望まれます。

今後は、健康の維持増進にかかわる学問領域においては、新たな科学的方法論が開発されることが望まれます。特に、健康づくりの現場で活用できる簡便で、精度のいい多様な研究ツールの開発は、この分野の研究が大きく発展するための必須条件と思われます。そして、そのような新しく開発された方法やツールがそれぞれの研究分野で応用されることにより、健康の維持増進に関する学問領域が全体として大きく発展することが期待されます。そのような新たな科学的方法論の開発とそれらを活用した研究により、新たな健康の維持増進に関する科学的知見が蓄積されることになるでしょう。そして、このような研究は、それぞれの研究分野での成果として認められることは当然ですが、同時に、複合領域としての運動疫学研究としても科学的に有意義なものと思われます。

当研究会では、運動・身体活動の科学的知見を疫学的方法論と独自の科学的方法論によって解明し、社会に対して積極的かつ責任のある情報を提供していくことが、今後の役割だと考えます。そのためには、研究会の主な事業である学術研究集会、「運動疫学研究」、運動疫学セミナーへの会員の皆様の積極的な参画が望まれます。さらに、今後は研究会会員の中から多様な活動が生まれ、研究分野にとらわれない多くの成果が次々と当研究会の会員から発信されることが期待されます。設立以来5年目を迎えた今こそ、運動疫学研究会が真に意味のある研究会へと大きく発展する時期であると思います。そのためには、会員一人ひとりが情報の受け手としてだけでなく、発信者としても発想し、活動していただくことが必須と思われます。

会員諸氏の新たな研究会づくりへの積極的な参画とご協力を大いに期待したいと思います。